一御火燵蒲團　二

〔後撰夷曲集四冬〕ふとん

大和にもおる唐綿のいとなみは今敷島のもめんふとんよ　忠直

〔撮壤集中家具〕蚊帳（カチャウ）

〔運歩色葉集加〕蚊帳（カチャウ）

蚊帳名稱

〔倭爾雅五衣服〕蚊廚（カヤ）蚊帳也

〔書言字考節用集六服食〕蚊廚（カヤ）又云蚊帳、見根本雜事

〔倭訓栞前編六加〕かや　蚊子幬をいふは蚊屋也、日本紀に見へたり、儀式帳に蚊屋帷とも見ゆ、

〔日本書紀十應神〕四十一年二月、是月阿知使主等自呉至筑紫、略中既而率其三婦女、以至津國、及于武庫、而天皇崩之不及、卽獻于大鷦鷯尊、是女人等之後今呉衣縫、蚊屋衣縫是也、

〔播磨風土記飾磨郡〕賀野（カヤノ）里、幣丘土中上、右稱加野者、品太天皇巡行之時、此處造殿、仍張蚊屋（カヤ）、故號加野、山川之名亦與里同、

〔三養雜記二〕蚊帳

蚊帳といふもの今は家毎になくてかなはぬ物なれど、古書には蚊やり火をこそ和歌にもよめ、蚊屋の名は、わづかに太神宮儀式帳、延喜式に見えたり、また春日驗記畫詞に、白き蚊帳をかけたるかたをゑがけり、近くは吉田鈴鹿家記寶德元年四月九日、花園殿より蚊帳參るとあるよし、おもふに室町家の頃よりは、今の如く夏月はかならず蚊帳をさぐることゝ見えたり、おほかた紐にてつることはなくて、棹にてかぐること、そのかみの禮家の記錄に見えたり、それも日毎にはづしたるにはあらで、吉日えらびてつりそめ、又吉日にをさむることなり、今も邊鄙には棹にてつるならはしの存れる地もありとかや、棹にてつるには、布ごとに乳つきてあり、予美成山崎が家